

## 本校教科外体育の実態に関する調査

保健体育科

### はじめに

学校における体育の場は、教科体育と教科外体育とに大別される。このふたつの領域はそれぞれ独立して存在するものでないことはいうまでもないことである。そしてこのうちのどちらかひとつが欠けても体育の目的を達成することはできないと考えられる。すなわち学校における体育の効果をより高いものにするためには、学習指導を効果的にし教科体育を充実しなければならないということはいうまでもなく、これと関連して、生徒の自由時の体育活動を豊かなものにしてやるための方策が考えられなければならないと思われるのである。特に大学受験の準備などに追われ、日常の運動生活が貧弱になりがちな本校生徒に対しては、その運動生活を豊かなものにしてやるのが、われわれに課された大きな仕事のひとつであると考えられる。

われわれはここ数年、本校の教科外体育に対してはほとんど特別な対策を講じることなくきてしまっている。われわれはこの点を反省しいくらかでも教科外体育に手を加え生徒の運動生活を豊かにしていかなければならないと考えた。しかし現在の本校生徒の運動生活の実態がはっきりしていないため、まずその実態をできるだけ正確につかむことを試みたのである。

すなわちこの調査は、本校生徒の運動生活の実態が、どのような姿をしているのかということ把握すること、ならびに今後どのような対策を考える必要があるのかを知ることが目的として行なったものである。なお、この調査にあたっては、東京教育大学体育学部体育管理学研究室より、調査方法その他について指導を得たことを付記する。

### 〔調査内容および方法〕

教科外体育の経営を考える場合、行ないうる Physical education service としては、Club service, Program service, Area service, の3の方法が考えられる。

これらの Physical education service によって吸収しうる生徒の層をそれぞれC<sup>\*</sup>階層、P階層、A階層とし、この3階層に入らない生徒をS階層としている。

この調査では以上の階層を基本とし、運動生活の階層構成、運動に対する主体的条件、運動能力について年間にわたり調査を行ない、現在の本校における教科外体育経営の欠点、運動能力の発達程度および運動生活との関連などを明らかにしようところみた。

- \* C階層 運動欲求が強く運動のクラブにでも所属してでも運動をしようというような人びとの層。
- P階層 運動のクラブに所属しようとまでは思わないが、校内競技とかレクリエーションの会とかの運動プログラムが催されると、進んで参加しようとする人びとの層。
- A階層 運動欲求の強さは上記の人びと程ではないが手近に運動の設備や用具があれば自由に運動してみようという人びとの層。
- S階層 運動をすることがきらいで日常生活に運動をとり入れようとならない人びとの層。  
「学校体育の経営管理」・江尻容・宇土正彦共著・光生館

2. 質問紙法および記録測定で次の項目について調査を行なった。

- 運動生活の階層構成について
- 運動生活と運動能力の関連性について
- 運動に対する主体的条件について

3. 調査対象

高等学校一年男子	162名
高等学校二年男子	160名
合計	322名

4. 調査期日

昭和37年9月～昭和38年10月

5. 参考文献

- 1 「学校体育の経営管理」 江尻容・宇土正彦共著・光生館
- 2 「運動生活に関する体育管理学的研究」 宇土正彦・東京教育大学体育学部研究紀要・昭和36年度
- 3 「児童生徒運動能力調査報告書」 文部省・昭和34年度

〔結果と考察〕

1. 運動生活の階層構成について

表 1-1 形式的階層構成 (37年度高1)

階層	C			P			A			S
	a	b	c	a	b	c	a	b	c	
N	12	54	13	0	0	38	3	0	5	
%	7.5	33.7	8.1	0	0	23.8	1.9	0	3.1	
N	79			38			8			35
%	49.4			23.8			5.0			21.8

表 1-2 実質的階層構成 (37年度高1)

階層	C+P.A		A		S	
	C	P.A	Aa	Ab	S	その他
N	66	0	5	3	65	21
%	41.3	0	3.1	1.9	40.6	13.2
N	66		8		86	
%	41.3		5.0		53.8	

表 2-1 形式的階層構成 (38年度高1)

階層	C			P			A			S
	a	b	c	a	b	c	a	b	c	
N	42	50	23	0	0	9	1	3	9	
%	25.9	30.9	14.2	0	0	5.6	0.6	1.8	5.6	
N	115			9			6			32
%	71.0			5.6			3.7			19.8

表 2-2 実質的階層構成 (38年度高1)

階層	C + P・A		A		S	
	C	P・A	Aa	Ab	S	その他
N	92	0	1	3	25	8
%	56.8	0	0.6	1.8	32.1	4.9
N	92		4		66	
%	56.8		2.4		40.8	

表1-1および表2-1は37年度および38年度の本高校1年男子の運動生活の階層構成を形式的にとらえたものである。これに対し表1-2および表2-2は同じく運動生活の階層構成を実質的にとらえたものであり、ここでは<sup>\*</sup>C, P, A, 各階層とも形式的なcをS階層と同じに取りあつかっており実質的なa, bのみをとりあげている。

学校における生徒の運動生活を考える場合には、その生活の内容として組織性と継続性を問題にしなければならない。この点で組織性、継続性共にあるC階層は問題ないが、それ以外の生徒は組織性はあるが継続性の乏しいP階層と、反対に継続性はあるが組織性に欠けるA階層の結合した形、P・A階層という形でできるだけ多くの生徒を収容しなければならないのではないのではないかと考えられる。この観点で以上の表を検討してみると次のような点がみられる。

- 形式的階層構成では、37年度に比較して38年度の方が階層が増加し、P階層が減少している。また、A階層、S階層もわずかに減少している。
- C+P・A階層、すなわち望ましい運動生活をしている生徒は両年度ともに5割前後であるが、その中のP・A階層は両年度ともに皆無である。

\* C, P, A, 各階層ともその中で実質的なものをCa, Pa, Aaとして形式的なものをCc, Pc, Acとし、その中間のものをCb, Pb, Abとする

○ C階層の中で、37年度はCbが大部分をしめていたが、38年度はCa, Cbが同数に近くなっている。

○ 両年度ともP階層, A階層の少ないのが目立っている。

これらの結果を考察してみると、全体に貧弱ながら、階層構成としては、37年度より、38年度の方が、望ましい方向に向っていると見える。すなわち、実質的に運動生活を持っている生徒の割合が増加していること、反対に、S階層が減少していることなどがその理由としてあげられる。しかし、ここで問題となることは、この変化が、体育科の意識的の方策によって起ったのではないということである。体育科では37年度より教科体育の指導を意識的に改善、研究中なので、この間接的影響とも考えられないでもないが、教科外体育に関してはほとんど手が加えられていないのがその現状なのである。このため、37年度、38年度ともP・A階層が全然なく、P階層のみ考えてもPa, Pbが皆無であること、またA階層の人員もわずかであり、しかも37年度より38年度の方が減少しているなど、はっきりと本校教科外体育経営の欠点をあらわしている。

このことから今後体育科の課題としてP階層, A階層を作り出すために運動プログラムの回数、時期、内容など再検討を行なうとともに、自由時間の施設用具の使用についても検討を行ない、Program service および Area service の充実をはからなければならないかと考える。

## 2. 運動生活と運動能力の関連性について

表3-1および表3-2は共に年度の本高校1年および2年の男子についての基礎的運動能力を調査したものである。

この表について考察を行なう前に運動生活と運動能力との関連性に関して次のようなことがらについて予想を立てた。

○ 運動生活が実質的に望ましいものであればあるほどそれにつれて運動能力も発達する。したがって、各種目とも階層別に比較してみると  $C > P.A > A > S$  の関係になる。

○ 運動能力は文部省報告、その他の資料から普通の状態では高校2年の方が高校1年より発達している。しかし運動生活の持ち方で両学年の差はちじめることが可能である。したがって本校では高校1年の方が運動生活において好ましい結果を示しているので両学年の運動能力を比較した場合、ほとんど運動生活を持っていないS階層における差は全体で比較した場合、C階層で比較した場合となるにしたがって小さくなると思われる。

表 3-1 運動能力検査結果

		50m走	立幅とび	懸垂	敏捷	ソフトボール投	垂直とび	連続片足とび
C	X	7.3	228.9	7.5	7.0	56.8	58.7	172.6
	SD	0.4	16.8	4.1	0.7	8.1	5.8	11.4
	Max	6.2	286	18	8.5	75	68	198
	Min	8.2	190	1	5.0	33	42	137

A	X	7.4	333.4	4.8	6.5	52.8	55.0	662.2
	SD	0.5	12.8	2.8	1.3	6.7	6.5	8.6
	Max	6.6	256	7	7.8	63	68	176
	Min	7.9	220	2	4.0	46	51	150
S	X	7.6	216.0	5.4	6.8	50.5	51.3	163.4
	SD	0.5	16.7	2.5	0.8	9.9	6.6	11.8
	Max	6.8	254	11	9.0	69	68	190
	Min	9.9	162	0	5.0	24	73	123
高一全	X	7.4	226.3	6.6	6.9	54.2	56.1	168.6
	SD	0.4	16.8	3.6	1.0	9.3	6.1	14.1
	Max	6.2	286	18	9.0	69	68	198
	Min	9.9	162	0	4.0	24	73	123
全国	M	2.8	221.6	7.0	6.5	50.8	50.1	—
	SD	0.7	17.2	3.1	0.5	8.5	6.9	—

表 3-2 運動能力検査結果 (高2)

		50m表	立幅とび	懸垂	敏捷	ソフトボール投	垂直とび	連続片足とび
C	X	7.4	234.1	7.2	6.5	57.9	52.6	178.6
	SD	0.4	16.4	3.6	0.7	9.0	5.4	11.1
	Max	6.4	269	16	8.5	80	70	200
	Min	8.5	192	0	4.8	39	40	155
A	X	7.3	229	7.0	6.4	58.5	54.9	178.5
	SD	0.3	9.8	2.2	0.4	7.3	3.9	13

	Max	6.8	242	10	7	66	62	199
	Min	7.8	210	4	6	41	48	157
S	X	7.6	223.1	5.5	6.4	59.7	49.4	170.2
	S D	0.4	17.4	3.4	0.7	11.4	5.6	15.3
	Max	6.8	264	16	7.5	75	61	301
	Min	8.4	181	0	5.0	24	36	110
高二全	X	7.5	227.9	6.3	6.4	58.9	51.6	174.1
	S D	0.4	17.3	3.5	0.6	9.6	5.5	13.9
	Max	6.4	269	16	8.5	80	70	201
	Min	8.5	181	0	4.8	24	36	110
全国	M	7.8	225.5	7.3	6.8	35.2	51.5	—
	S D	0.7	16.4	3.3	8.0	9.7	6.9	—

以上の予想にしたがって考察を試みた。しかし実際には本校生徒にP・A階層がなく、A階層もわずかしかないので、C階層およびS階層の比較にとどまった。

結果は高校2年の「ソフトボール投げ」を除いた全種目が、1年、2年ともC階層がS階層を上まわっている。また同じく高校2年の「ソフトボール投げ」を除いて、両学年、全種目ともC階層は学年の平均を上まわっており、S階層は学年の平均を下まわっている。この結果が両学年とも望ましい運動生活を持っていることを示している。しかしこの結果は単に運動しているものは運動していないものより運動能力が高いということを示しているだけにすぎず、その運動能力が、本校の運動生活の結果によって発達したものであるか、または初めから運動能力の高いものが運動クラブに入ったのかを判断することはできない。そこでこの問題を解く手がかりとして第の予想にしたがって高校1年と高校2年の比較を行った。昭和34年度の資料ではあるが、表3-1と表3-2の全国平均を比較してみると50m走の記録が同じであるのみで他の種目はすべて高校2年の方が上回っている。また、高校2年はまた成長期が終っていない時期なので正常な状態では当然高校2年の方が上回っているのものであると考えられる。このことからまず両学年ともほとんど運動生活を持っていないS階層、即ち、両学年で条件の同じ階層で比較してみると「50m走」は同記録、「立幅とび」「懸垂腕まで」「ソフトボール投げ」「連続片足とび」に高校2年が高校1年を上回り、高校1年が上回っているのは、「敏捷性」と「垂直とび」の2種

目である。これは本校においても基本的には高校2年の運動能力が高校1年のそれを上回っていることを示している。ところが高一全体の平均と高校2年全体の平均を比較してみると、高校1年が上回っているものは「50m走」「懸垂腕まげ」「敏捷性」「垂直とび」の4種目、これに対して高校2年が上回っているものは「立幅とび」「ソフトボール投げ」「連続片足とび」の3種目となっており、全体的に見るとS階層に見られた差をちぢめその上幾分上回っているような傾向がみられる。更に両学年のC階層について比較してみるとここでも学年平均と全く同じ傾向を示し、高校1年の方がわずかに高校2年を上回る傾向にある。ここで比較したC階層の内容は高校1年がCaが25.9%、Cbが30.9%となっているのに対し、高校2年ではCaが7.5% Cbが33.7%とCbが極端に多い。即ち、同じC階層でも高校1年の方がはるかに良い内容を持っているために当然あると考えられる学年による差をなくしているのである。

以上、階層による運動能力の差と学年による運動能力の差の2点から考察した結果、運動能力の発達には個人の運動生活の持ち方に左右されるということ、また本校生徒の運動生活を4つの階層でとらえるということに意味があるということがある程度ははっきりしたようである。

### 3. 運動に対する主体的条件について

#### a. 運動欲求について

運動欲求については、運動に対する関心の度合を通して調査を行なった。表3-1と表3-2はそれぞれその結果である。

表 3-1 運動欲求 (N/%)

階層	C	Ca	Cb	Cc	P	Pa	Pb	Pc	A	Aa	Ab	Ac	S	...
N	79	11	54	13	38			38	8	3		5	35	160
1					1			1					4	4
					2.6			2.6					2.5	2.5
2	3		1	2	2			2					2	7
	3.8		1.9	15.4	5.3			5.3					5.7	4.4
3					1			1						1
					2.6			2.6						0.6
4	6	1	4	1	2			2	2	1		1	7	17
	7.6	8.3	7.4	7.7	5.3			5.3	25.0	33.3		20.0	20.0	10.6
5	6		6		5			5					2	13
	7.6		11.5		13.2			13.2					5.7	8.1
6	64	11	43	10	26			26	6	2		4	22	117
	81.0	91.5	79.5	77.0	68.4			68.4	75.0	66.7		80.0	60.0	73.1

1. 運動に対して関心を示さないもの。
2. 雑誌や新聞のスポーツ欄はみる。
3. スポーツ新聞、スポーツ誌を買ってみる。
4. スポーツ放送を見たり聞いたりする。

5. 競技場で実際に見る。  
 6. 実際に運動したい。

全体で見ると、約4分の3が内容はともあれ、実際に運動をしたいという欲求を持っている。しかも各階層毎に見てもほとんど同じ傾向を示している。このことは高校生の特質としては当然の結果といえる。

しかし、ここで注目しなければならない事実として、スポーツを見たり聞いたりする、という層が意外に多いということである。

この傾向は現代社会の一つの大きな特色であるが、自身で運動をするのが当然といえる高校生にまでこの傾向が表われているという事実は、今後の高校教育における一つの問題点として残されるべきであろう。

表3-3は、実際に運動したいという欲求を持っているものがどのような内容の運動に関心を示めているかについての調査の結果である。

表 3-2 運動の内容 (N/%)

階層	C	Ca	Cb	Cc	P	Pa	Pb	Pc	A	Aa	Ab	Ac	S	全
a	23 45.9	7 63.6	14 32.6	2 20.0	1 3.8	0	0	1 3.8	1 16.7	1 50.0			26 4.7	26 22.2
b	31 48.4	4 36.4	19 44.2	8 80.0	17 65.4	0	0	17 65.4	5 83.3	2 100		3 75.0	12 57.1	56 55.6
c	19 29.7	6 54.5	12 27.9	1 10.1	7 26.9	0	0	7 26.9	2 33.0	2 100.0			3 14.3	31 26.5
d	8 12.5	2 18.2	5 11.6	1 10.0	6 23.1	0	0	6 23.1	3 50.0			3 75.0	7 33.3	24 20.5
e	6 9.4	1 9.0	43 100.0	2 20.0	3 11.5	2	0	3 11.5	3 50.0			3 75.0		12 10.3
f	16 25.0	3 27.3	10 23.3	3 30.3	6 23.1	0	0	6 23.1	3 50.0	1 50.0	1	2 50.0	5 23.8	30 25.6
g	15 53.4	1 9.1	13 30.2	1 10.0	3 11.5	0	0	3 11.5					4 19.0	22 18.8
h	20 31.3	3 27.3	13 30.2	4 40.0	3 11.5	0	0	4 11.5	1 16.7	1 59.0			4 19.0	28 23.9
i	32 50.0	4 36.4	23 55.8	4 40.0	11 42.3	0	0	11 42.3	3 50.0	1 50.0		2 50.0	8 38.8	54 46.2

- (a) 対外試合に参加することを目標として練習に励むクラブ(部)に入って運動したい。  
 (b) 対外試合のようなことは考えずにもっぱらお互の楽しみやレクリエーションとして練習するクラブや部に入ってしたい。  
 (c) 勝敗をはっきりきめる競技会や試合に参加したい。  
 (d) 勝敗のことよりみんなでゲームや楽しむような運動のもよおしに参加したい。  
 (e) 勝敗に関係のない運動をするもよおしに参加したい。  
 (f) 先生や上手な人に教えてもらいながら運動を楽しむもよおしに参加したい。  
 (g) 体力テストのように自分の力をためすためのもよおしに参加したい。

(h) 運動する場所がはなれていたり、用具を借りるのがめんどろであったりしても、また仲間がいなくても、あるいは仲間をさそってでも、自分の好きな運動を何かしたい。

(i) 運動をする場所や用具が手軽に使えるような場合には、自分の好きなように運動したい。

全体では、bおよびi即ちレクリエーション的クラブへの参加と、自分の好きなように運動したいという項目に多くの解答が集まっている。ただしCa階層のみに関してはaおよびcが多く、クラブ活動の特色をあらわしている。

これらの特色がそのまま前述の階層構成にあらわれているとみることができよう。C階層の中の大部分が中間的なものであるということ、レクリエーション的なもの、勝手気ままに行うものに対して欲求を持つということ、このあたりに共通する問題点が存在するようである。

#### b. 運動の必要性の自覚

生徒が運動することの必要性をどのような理解のもとに自覚しているかをみた。

表4-1は、運動が必要であるかどうかという問に対する結果である。

表 4-1 運動は必要かどうか (N/%)

階層	C	Ca	Cb	Cc	P	Pa	Pb	Pc	A	Aa	Ab	Ac	S	全
N	79	12	54	13	38			38	8	3			35	160
1	2 2.5	1 8.3		1 7.7	2 5.3			2 5.3	1 12.5	1 33.3			1 2.9	6 3.8
2	39 49.4	6 50.0	25 46.3	8 61.5	24 63.2			24 63.2	5 62.5	1 33.3		4 80.0	25 71.4	93 58.1
3	34 43.0	5 41.8	26 48.1	3 23.1	12 31.8			12 31.6	2 25.0	1 33.3		1 20.0	6 17.1	54 33.8
4	3 3.8		2 3.7	1 7.7									3 8.6	6 3.8

(1) 自分の生活では今のところ必要でないように思う。

(2) 自分の生活では現在運動した方が良いように思う。

(3) 自分の生活では現在ぜひ運動をする必要があると思う。

(4) 自分の生活では必要かどうかよくわからない。

全体では消極的に必要を認めているものが半数以上、積極的に認めているものがこれに次いでおり、両者を合わせると9割以上が必要を認めている。

表4-2は、必要性を自覚しているものがどのような点で必要と認めているのかを表わしたものである。

表 4-2

運動が必要なわけ (N/%)

階層 項目	C	Ca	Cb	Cc	P	Pa	Pb	Pc	A	Aa	Ab	Ac	S	全
a	8 11.0		7 12.4	1 951	6 16.6			6 16.7	1 14.3			1 20.0	5 16.1	30 13.6
b	8 11.0	3 27.3	5 8.9		2 5.6			2 5.6					4 12.9	4 9.5
c	47 50.7	9 81.9	32 56.9	6 54.6	20 55.6			20 55.6	5 71.4	2 100.0		3 60.0	19 61.3	91 61.9
d	58 79.5	9 81.9	40 71.1	9 81.9	27 75.0			57 75.0	5 71.4	2 100.0		2 40.0	20 77.4	114 77.6
e	34 46.6	3 27.3	22 30.1	9 81.9	15 41.7			15 41.7	3 42.9	1 50.0			13 16.9	65 44.2
f	30 41.1	6 54.6	19 33.8	5 45.5	19 52.8			19 52.8	1 14.3			1 20.0	8 25.8	58 34.5
g	17 23.3	3 27.3	13 23.1	1 9.1	6 16.7			6 16.7	1 14.3	1 50.1			5 16.1	29 19.7
h	12 16.4	3 27.3	9 16.0		3 8.8			3 8.3					2 6.5	17 16.6
i	1 1.4		1 1.7											1 0.7
j	2 2.7	1 9.1	1 1.7										1 3.2	3 2.0

- (a) 勉強や仕事ののうりつをあげるため
- (b) 運動がじょうずになったり、記録をあげたりするため
- (c) 健康の保持増進のため
- (d) 体力を強くするため
- (e) 気晴しのため
- (f) 運動するとおもしろいから
- (g) 運動すると毎日の生活が楽しくなるから
- (h) 友だちを作ったり、なかよくするため
- (i) 就職や進学に都合がよいから
- (j) 何となく
- (k) そのほか

この表では運動の必要性を健康の保持、増進、体力の増強という点で認めているのが多いことを示している。

これらに続いては「気晴し」「面白いから」等が挙げられている。この傾向は各階層とも共通している。このことから多くの生徒が観念的には、運動はからだに良い効果を与えるということを知っているとみることができる。

しかし体育では知っていることが大切なのでなく行なうことが大切なことはいうまでもないことである。ほとんど運動を生活にとり入れていない、S階層においてもその8割近

くが運動が必要であることを認めている。

また、気晴しや面白いからという理由より、健康の保持・増進、体力の増強という理由で運動を認めている。しかしながら、生徒が実際にしたい運動は表3—2にあらわれているよう「レクリエーション的」なものなのである。運動は必要なのだと知りながら運動をしないもの、健康の保持、増進、体力の増強のための運動が必要なのだと知りながら、軽い運動を自由に楽しむもの、これらの事実は特に保健体育の学習指導において解決しなければならない問題であると思われる。

### 〔ま と め〕

今回の報告は前に述べた通り、生徒の実態を把握することが目的であった。この目的は一応達成することができたようである。

われわれは日頃「本校の生徒はからだ弱い」とかまたはこれに類するような言葉をしばしばきいてきた。このことは運動生活の内容を考えてみても或る程度肯定しなければならない事実である。しかし、われわれはこの問題を現在の社会状況とか生徒自身の問題としてのみ考えがちであったようである。

もちろん、主体的条件の調査結果に見られるように、生徒自体にも問題は多い。しかし生徒の学校における運動生活を管理するわれわれは、そうした生徒にもできるだけ豊かな運動生活を持たせるように考えて行かねばならないのである。この点で今後われわれが何をしなければならないかをはっきりとさせ得たことは大きな収穫であったといえる。すなわち、前に述べた通り、学校における生徒の運動生活を考える場合、望ましい形は、C＋P・A 階層で生徒のできるだけ多くを収容することであると考えている。

本校の現状を考えた場合、P・A 階層ならびに A 階層で生徒を収容す適当ではないかと考えられる。しかし本校では階層構成の表でみらる通り P・A 階層、A 階層は全く見られない、このため来年度は P 階層、A 階層を増すような方策を打ち出すことが必要と思われるのである。この方策のひとつとして考えられることは Program service の回数増加、運営方法、参加資格、教科カリキュラムとの関連性、Program 前後の練習等を考えること、また、自由時間に気軽に運動ができるように用具の貸出し、施設の開放、等 Area か service の検討をなうことなどがあげれる。

そしてその他の問題として今後考えていかねばならないことは、以上のような方策を意図的に行なった場合には、本校における生徒の階層構成、運動能力にどのような変化が起るであろうか、また、生徒自体の条件がどのように変わって行くかを継続的に見つめていかねばならないということである。

われわれももちろん今後この研究調査を続けて行くつもりなので、その結果はいづれかの機会に報告を行ないたいと考えている。

昭和38年度教官研究会参加一らん

番号	参加教官氏名	研究会名	出張先	日程
1	神藤 邦 芳	文部省主催 社会科地理講座	栃木県 理科教育センター	月日 月日 5.27～ 6. 1
2	坂根 義 久	同上 高校 倫社講習会	茨城県立笠間高等学校	6.17～ .22
3	佐野 清	技術・家庭科 実技研修会	都内・東京大学附属高等学校	7.31～ 8. 4
4	喜多 耕作	全国数学教育研究大会 日数教45回	広島県立広島国泰寺高等学校 公会堂・体育館	8.7～ .11
5	牛田 英 一	文部省主催 理科地学講座 (東部地区)	岩手県理科教育センター (盛岡市上田殿堀85の7)	9.16～ .21
6	松井 一 夫	東日本地区国語教育協議会	宇都宮大学	10. 3～ . 4
7	坂根 義 久	日本教育史学会	大阪学芸大学	10.10～ .11
8	佐野 清 岡村 彰	第2回関東甲信越地区技術・家庭科研究大会	千葉市立花園中学校 " 幕張中学校	10.17～ .18
9	福岡 久雄 巻島 三郎	13回 日本理科教育会	都内・教育大学	10.19～ .21
10	佐野 清	第2回全国中学校 技術・家庭科研究大会	岡山県岡山市弓之町87番地 市立旭中学校	11. 6～ . 9
11	高井 霞 綿引 守光 神藤 邦 芳	東京都主催 ホーム・ルーム研究発表会	都内 都立目黒高等学校	11.19
12	深野 明	高等学校教育課程研究発表会 (保・体)	総会 大妻学院(都内) 保・体=日比谷高等学校	11.20～ .22
13	大西 光 興	同上(外国語)	同上 外国語=上野高等学校	同上
14	大塚 勝 夫	日本体育学会	京都同志社大学	11.26～ .28
15	多田 逸 郎	音 楽	都 内	
16	梅沢 力 夫 高井 霞 重松 樗 三	付連高校部会 研究会打ち合わせ会	広島大学附属中学校	39. 1.16～ .19
17	高田 栄 一	スキー	志賀高原発着スキー場	2. 3～ 2. 7

付 属 連 盟 関 係

梅沢 力 夫 高井 霞 佐野 清	付属連盟総会 (幼・小・中・高校)	千葉県	
梅沢 力 夫 佐近 良 一 明石 総 一 高井 霞 体育保健 4名 理科 4名	付属連盟高校部会 研究発表会	都内 学芸大学附属高校	11. 8～ . 9